子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈3〉
― 平成18年度実施プログラム ―

幼児教育専攻　若杉　雅夫　三羽佐和子　伊藤　功子　長谷部和子
篠田　美里　杉山喜美恵　瀬地山葉矢〔※〕　生嶌亜樹子

はじめに

本学、児童教育学科幼児教育専攻では、「地域との共生」をテーマに、次世代支援の中核と成している「子育て支援」と、保育者養成としての「学生の心の育成」を理念とした子育て支援プログラム「あそびの森」を平成16年度に立ち上げ、実施運営を行っている。3年目となる平成18年度は、以下の三点に配慮した。一つ目は、「育児懇話会」の継続と発展、二つ目は、参加希望日をできるだけ叶えるための工夫であり、三つ目に学生の育ちの検証であった。また、この「あそびの森」の運営、及び活動を通して培った点として、教員の意識改革が挙げられる。さらに、新たな取り組みとして、岐阜市女性センター主催の次世代育成支援事業「HAPPY DAY」に主催者より依頼があり、出張開催した。

各プログラムの実施の方法、検証の中で上記の四点について述べていくこととする。

分担

Ⅰ　運営

運営委員

平成18年度「あそびの森」の運営委員は三羽佐和子・瀬地山葉矢・生嶌亜樹子の三名が担当した。また、今年度プログラムのチラシの作成、近隣の幼・保への配布、DMの送付、申し込みに対する人数調整や返信、問い合わせの対応等は、運営委員の指揮の下、専攻教員全員で取り組んだ。

①　担当

各プログラムの運営と責任は各教員とゼミ生が担当した。その他、各回、2名の教員が補助として当日の実務を担当した。

②　遊びプログラムの運営

プログラムのテーマは各教員が起案した。プログラムのテーマにもとずいた遊びの企画及び運営については各教員のゼミ生が担当した。

Ⅱ　記録

2006年度「あそびの森」　プログラムの活動報告執筆分担は以下の通りである。

（1）前期（5月～9月）プログラム

No.①5月17日
「小麦粉粘土・スライムで遊ぼう」
執筆及び担当　三羽佐和子

No.②6月24日
「育児懇話会・おねえさんとあそぼ」
執筆及び担当　杉山喜美恵　瀬地山葉矢

No.③7月8日
「ダンボールのパズル絵」
執筆及び担当　若杉　雅夫

No.④8月26日
「跳んだり、跳ねたり、転がってあそぼ」
執筆及び担当　伊藤　功子

No.⑤9月9日
「ペーパークラフトひこうきをつくろう」
担当　松尾　良克

（2）後期（10月～2月）プログラム

No.⑥10月14日
「A,B,C,と　あ、い、う、え、お」
執筆及び担当　長谷部和子

No.⑦12月2日
「歌いましょう・踊りましょう」
執筆及び担当　篠田　美里

No.⑧12月16日
「クリスマス会」
執筆及び担当
生嶌亜樹子・担当　杉山喜美恵

※　平成19度日本福祉大学

No.⑨ 1月27日
「粘土遊びのクッキー作り」
執筆及び担当　　若杉　雅夫
No.⑩ 2月17日
「子育て懇話会・つくってあそぼ」
執筆及び担当　　三羽佐和子他
（3）その他のプログラム
① 9月16日　「出張あそびの森」
担当・若杉雅夫・三羽佐和子　担当及び執筆篠田美里
② 12月15日「あそびの森をたんけんしよう」
担当・若杉雅夫・担当及び執筆篠田美里
③ 2月10日「幼稚園の交流会」
担当及び執筆　若杉雅夫・担当三羽佐和子・篠田美里
「はじめに」「総括」「おわりに」執筆　篠田美里

活動報告

1）前期プログラム（5月～9月）

プログラムNo.①
活動名　「小麦粉粘土・スライムで遊ぼう」
実施日　平成18年5月17日
10：00～11：45，13：30～15：00
ねらい
・スライムや小麦粉粘土のすべすべ，ひんやり，さらさら，べとべとなどの感触を楽しむ
・丸めたり，のばしたり，ちぎったり，作ったり，壊したりなどして遊ぶ
担当者　三羽佐和子
参加人数　112名　参加家族44組
（保護者47名／子ども65名）
手伝った人数および担当者
教員：5名　学生30名
担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援
内容
＜小麦粉粘土遊び＞
小麦粉粘土やスライムは初めて経験する親や子どもが殆どで，その感触を十分に楽しんでいた。親が予想以上に喜んでおり，子どもそっちのけで楽しむ父親もあった。
小麦粉粘土では水を少しずつ入れるように伝えたにもかかわらず，入れすぎてべたべたになり，後から小麦粉を付け加えるということもあったが，それはそれで楽しんでいた。学生がよく面倒を見てくれていた。
小麦粉粘土やスライムでさらさら・べとべと・すべすべ・ひんやり・すべすべ・グチャグチャなどの感触を十分に楽しんだ。また，のばしたり，ちぎったり，丸めたり集めたりして，作っては壊し，作っては壊して楽しんでいた。ドーナツなどのお菓子，チューリップなどの花，ヘビ・カタツムリ・ウサギなどの小動物など、様々なものを作っている子もいたが，多くは感触遊びを喜んでいた。

「こーんなにのびるよ」

分量的には，2組で一つのバケツで，200グラムの小麦粉でちょうど良かった。スライムは準備した分量が少し不足したが，午後の前に作っておき，午後も十分に間に合った。みんな喜んで，おみやげにして持ち帰った。
作り方の説明書を渡したが，やってみると言う親も何人かいた。
午前の部は小麦粉粘土からスライムに移るときに，手洗いや掃除に手間取り，後の絵本読みや，体操へ時間がずれ込んだ。午後はその反省にたって新聞紙を敷いたり，手洗いを最小限度したりするなどして，時間をうまく使った。
時間的には，昨年のように小麦粉粘土だけの方がよかったが，ぜひ，スライムも経験させたかったので組み込んだ。欲張った分，こちらは大変であったが，参加者や学生は大い

に楽しんだようだ。

学生たちの手遊びや体操，絵本，進行はまあまあであったが，遊びの説明は午前午後ともに，もう少し丁寧に分かるようにできると良いと思った。

それぞれ係の仕事は一生懸命に取り組んでいた。準備から後片づけまできちんとでき，実習に行く前のよい経験になったように思う。

反省および考察

大きな混乱もなく，比較的スムーズに流れた。前日までの準備をしっかりした結果と思う。何度も篠田先生や学生と打ち合わせや、リハーサルを行った結果である。綿密な打ち合わせや準備は，会をスムーズに行うために今後も必要。

小麦粉粘土やスライムのような感触遊びは，汚れることが気になって，家庭ではなかなかさせてもらえない活動である。親子ともとても楽しんだ姿を見て，このような活動を，今後も大いに取り上げ，「あそびの森」ならではの活動を展開したい。

駐車場については，他の行事とも重なった。前もって行事予定に入れてもらう必要がある。

プログラム№②

活 動 名　親：子育て懇話会
　　子：おねえさんとあそぼう

実 施 日・会　場

平成18年6月24日（土）
　10：00～12：00・保育実習室

ね ら い

親：子育てにおけるストレスを軽減する
子：親と離れた時間を楽しく過ごす
学生：
・子どもの分離不安を軽減し、安全性に配慮しながら、楽しい時間を共有する
・託児をする際に必要な配慮、技術を習得する

担 当 者　懇話会：瀬地山　葉矢
　　託　児：杉山　喜美恵

参加人数　50名　参加家族：17組
　　（保護者21名、子ども29名）

手伝った人数および担当

教員：6名　学生：26名
心理療法士：3名

内　　容

親：少人数グループによる懇話会
子：年齢別グループによる活動
0・1歳児：作ったおもちゃで遊ぶ、ふれあい遊び
2歳児：手あそび、絵本、自由遊び
3歳児：かぶり物つくり
4歳児：牛乳パックのとんぼ作り
5・6歳児：木まで飛ばそう（せみさん入れゲーム）

反省および考察

親が懇話会に参加している間、子どもたちが親と離れて楽しい時間を持てるよう、グループ活動を計画した。また、参加する子どもたちが0歳から6歳と年齢幅があるため、年齢別活動とした。親子分離が難しい2歳以下の子どもには前年度の反省をふまえ、学生が一人ずつ、担当の子どもを決めて託児することとした。

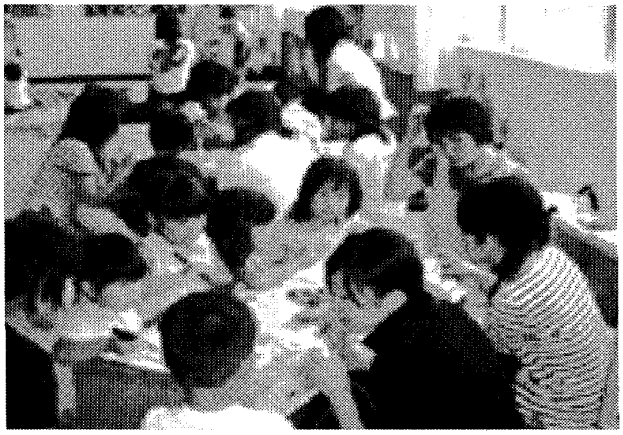
当初は29組の参加予定であったが、実際参加したのは17組で、予定よりかなり少なかった。そのため2歳以下の担当の場合、子どもが欠席すると仕事がなくなる学生が出る。今回の場合は、参加予定の子ども数が学生数を大幅に上回っていたため、子ども一人に対し、学生一人を担当させることができ、結果的にはよかった。また、前年度の状況より低年齢の子どもは自由に遊ぶことが多くなると予想したが、予想通り、保育実習室の中を自由に遊びまわる子どもたちが多く、1対1で子どもを担当できたことは安全性の面においてもよい結果となった。

このように当日にならないと参加者がわからない場合は、参加者数にあわせて臨機応変に対応できるよう、計画に弾力性をもたせることが重要となる。

親子が別々の活動をする場合、特に低年齢児においては、いかに親子分離をスムーズに行うかが大きな課題となるが、声がけ、タイミング、援助の仕方などを学ぶことができ、将来、子育てイベントにかかわっていくための有意義な機会になったといえる。

また、3歳以上の活動に関しては、前年度、他のグループの制作もしたいという声があったこと、自分のグループの制作を終えて時間をもてあます子どもが見られたという反省をふまえ、他の年齢グループの活動も参加できるようにした。その結果、今年は時間をもてあますことなく、いろいろな年齢グループを体験しながら、長時間参加する姿が見られた。

今回も瀬地山・杉山ゼミ合同での参加となったが、このように複数ゼミでおこなうことは、人数の確保や、教員、学生ともども協力や交流ができ、非常によいと感じた。



懇 話 会

ねらい　日頃の子育てを話題にしながら親どうしの交流をはかる。またその語り合いを通じて自分自身について、また子ども・家族との関わり合いについてあらためて振り返る。

参加人数　保護者17名

担　　当　瀬地山葉矢　他　臨床心理士4名

形　　式

今回の懇話会は17名の保護者(母)を迎え、子どもの年齢により【0・1歳児】・【2・3歳児】・【2歳以上の混合】の3つのグループ(各年齢グループとも1グループずつ)に分かれて「日頃の育児で感じること・困ったこと」をテーマに話し合いを行った。グループごとに、参加者の出した話題に他の参加者それぞれの体験談や解決案が示され、話し合いが進んでいった。ファシリテーターとして、【0・1歳児】と【2・3歳児】グループには臨床心理士が各1名ずつ、人数の多かった【2歳以上の混合】グループには臨床心理士2名が参加し、各グループの進行役を務めた。およそ1時間近くに渡る話し合いの間、子どもたちは、隣室のあそびの森で学生スタッフらによる主導のもと、主に年齢別の活動をしながら過ごしている。その際、親との分離が困難な子どもについては、懇話会の行われた部屋で親とともに過ごせるよう配慮した。

懇話会の内容とアンケートの結果(一部抜粋)および考察

懇話のなかで話題として挙がっていたのは、2歳児以上の子どものグループでは、「きょうだいの性格の違いについて」、「きょうだい喧嘩をどのように仲裁すればよいか」、「子どもの求める遊びにうまく関わることができない」、「食事の量が少ないことについて」などの子どもに関する話題、また「夫が子育てに関わろうとしない」、「働き盛りのため夫が子どもと関わる時間を作るのが難しい」など、子どもの父親および夫婦に関するものであった。このなかで子どもに関する話題についてみると、きょうだい喧嘩の仲裁の仕方、子どもとの(遊びでの)関わり方など、子どもをもつ親なら誰もが日常的に経験する内容が多い。これは、昨年度のあそびの森にて行った育児懇話会でも同様の傾向であった。一見些細に思われるこれらのことが、日々親たちを悩ませる事柄として話題に挙がることを周囲の者が理解するとともに、特に子育て支援にたずさわる者は、これを親の「力量」や「経験」の不足に結びつけて考えるよりは、親の置かれた状況、つまり些細なことすら話す機会をもてない状況に目を向けて対応する必要があるのではないだろうか。

また懇話会終了後に実施したアンケートのなかで、「今回、この育児懇話会に参加されていかがでしたか?」という質問には、良かった13名(76.5%)/まあまあ良かった4名(23.5%)/どちらでもない0名(0%)/良くなかった0名(0%)との回答を得た。それぞれの回答の理由についても尋ねているが、紙幅の都合で、以下に【2・3歳児グループ】に参加した母親たちの感想を取りあげ、先ほ

ど述べた懇話会の話題内容と併せて検討を加えたい。

【2・3歳児グループ】に参加した母親たちは、懇話会に参加して良かったと感じた理由について次のように記載している。「ふだんあんまり他のお母さん方とじっくりお話しする機会がないので(子供ぬきで)よかった」／「話すことで気持ちが楽になった」／「みなさん同じような悩みを持っていて自分だけではないんだと思えたこと、また悩みに対して具体的な参考意見が聞けたこと」。これらの記述からは、日頃親どうし交流する機会の乏しいこと、とはいえ、ひとたび集まりの機会が得られれば、そこでの語りを通じて何らかのカタルシス効果を感じているらしいこと、さらに、悩んでいるのは自分だけではないなど自身の体験を相対化・客観化していることが伺える。

「子どもについて話す機会がない」、「他の母親たちと話す機会がない」と訴える親の声にどう対応していくかは、現在の子育て支援全体に及ぶ課題でもある。最近では、各地域で親子へのさまざまな支援活動が活発に行われており、地域ごとにその充実度に差はあるものの、子どもの年齢を問わず親の集まる場は増えてきてはいる。それでも親どうしの交流が困難になる要因には、①子どもの年齢・未就園・障害の有無など、子ども側の要因、②場の安全性(相談する側のプライヴァシーが守られる環境かどうか)③親のパーソナリティーの問題やその他の家庭の事情、などが考えられる。それぞれの親が身を置く多様な状況に対応するには、特定の形式の支援を増やすだけでなく、異なる形式の支援活動、つまりそれぞれの親の状況に応じて、どこで・どのように支援を展開するかといった形式的側面についても配慮した活動が求められていると言えよう。

プログラムNo.③

活動名　「ダンボールのパズル絵」

実施日・会場

平成18年7月8日(土)　保育実習室

午前の部　10：00～12：00

午後の部　13：30～15：15

ねらい

・連想遊びをしてイメージを広げ、柔軟性と想像力を培う。

・ダンボールが造形表現の素材になることを体験し、身近な廃材に対する感受性を高める。

参加人数　総参加人数140名

午前　参加家族27組　保護者36名(母親27名・父親6名・その他3名)子ども45名　計81名

午後　参加家族21組　保護者24名(母親19名・父親4名・その他1名)子ども35名　計59名

担当者　若杉雅夫

参加スタッフ　教員：5名

学生　：25名

内容

ボランティアの学生が、スーパーやドラッグストア・家具店等で段ボール箱を頂き、丸や四角・波形など一生懸命切り抜いて、色々な形のダンボール片をたくさん用意した。

当日参加者は、ダンボール片の大きな山からいろいろな形をたくさん選び、画用紙の上で組み合わせ、形づくりの連想遊びをした。友達・カブトムシ・クワガタ・ロボット・家・幼稚園バスや機関車、ウサギや亀など、様々なものをダンボールの切れ端で表現する子どもの豊かな想像能力に驚かされ、遊びを支援する私たちも、広がりを持った楽しい時間を過ごすことができた。もちろん、お父さんやお母さんもお子さんと共に、「これがいいかな」「この形面白い」などと想像力を働かせ、形作りを楽しまれた。画用紙に貼ったダンボールに、クレパスで線や点、丸や三角・四角を描き加えると、連想した形が輝き始め、生き生きとした作品になった。

完成したダンボールのパズル絵をみんなの前で一人ずつ披露した。段ボール片の組み合わせから出来るイメージの豊かさに参加者全員が拍手喝采し、発表した子どもも、心が一杯に満たされた。

最後は丸や四角の段ボールを使って、顔のメダルを作った。自分の顔や、お父さん・お母さんの顔など楽しいメダルを首にかけて解散した。

反省および考察

ダンボールの造形あそびを、プログラムとして検討していた段階では、参加する子どもの年齢（２～６歳）を想定すると、活動としてやや難しいのではないかと考えていた。そのため、ダンボール片をかなり多く用意し、大きな山を作って、わくわくする宝探しのような遊びの要素を強くした。子どもの好奇心や興味・関心・意欲を引き出すように工夫したことが。工夫が功を奏したのか、子どもの活動は、考えていた以上に自由闊達に展開した。さらに、保護者も子どもと共に想像遊びに没頭され、この遊びを通して、親と子の一体感と共有感が増したのではないかと考える。

図-１　遊んだ後はみんなで記念写真

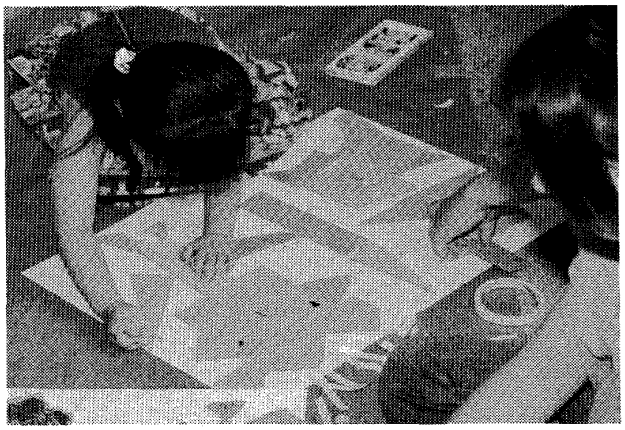


図-２　素敵な友達ができたね

プログラムNo.④

活 動 名

「跳んだり、跳ねたり、転がってあそぼう」

実 施 日・会　　場

平成18年8月26日（土）　保育実習室

午前の部　10：00～12：00

午後の部　13：30～15：15

ね ら い

発育・発達の著しいこの時期に、動作が上達する巧みな動きやバランス感覚、リズム感覚を身につける。今回は器具を使用してどんな跳び方ができるか、挑戦する意欲や活発な行動を身につける。

担当学生・教 員 数　　学生14名、教員5名

担 当 者　　伊藤　功子

参加人数　　148名　参加家族56組

保護者63名　子ども85名

内　　容

1．ディズニー体操

2．手あそび

3．親子でできるかな？

4．器具を使って

①マット

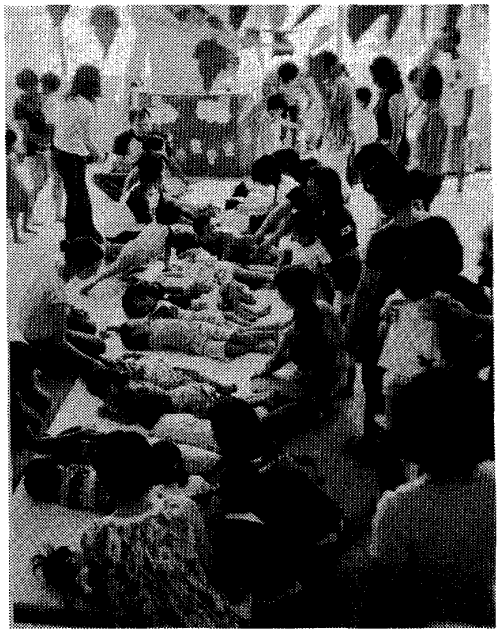
②ジャンピングシエイプ

③トランポリン

④カラーラダー

⑤バンプーダンス

5．絵本読み



（図1）

（図２）

反省および考察

「マットでごろごろ」（図１）

参加者に対して、器具の数が少ないので混雑が予想されたが、何とか決まりごとを守って活発に活動ができた。マットの上を転がる動作、トランポリンやカラーラダーを跳ぶ動作は回数を増やすことにより、目にみえてバランス・リズム感覚が身についていく様子がはっきりわかった。学生が子どもにワンポイントアドバイスをすることで、巧みな技を身に付け披露してくれたり、思いもつかない子どもの発想で跳びかたがいろいろでてきて、小さい子は大きい子の真似をしながら楽しそうに跳んだり転がったり汗いっぱいかいていた。手あそび、親子体操に、お父さん、お母さん、おばあちゃんが一緒になって参加している姿にはアットホームな雰囲気が感じられた。

「ぴょんぴょんとんで」（図２）

運動は繰り返し繰り返し遊ぶことによって身につけていくことがはっきりしたように思う。年齢が低ければ低いほどバランスやリズム感が身につくようだ。体育あそびには、親子でできる運動を数種取り入れている、家庭で是非親子のふれあいや運動不足解消に役立ててほしいと思う。今後の課題としては、年齢差の幅が広く、動作にかなりの差があったので、活動の内容を検討していきたい。

プログラム№⑤

活 動 名　「ペーパークラフト」

実 施 日・会　場

平成18年9月9日（土）

10：00～12：00　保育実習室

参加人数

参加家族18組

保護者18名　子ども32名　計50名

担 当 者　松尾良克

参加スタッフ

学生15名　教員4名

記　録（篠田記）

親子が協力して一つの作品を作ることを通して、親子のコミュニケーションをはかるねらいのもと「かみひこうきを作ろう」プログラムが開かれた。

幼児のはさみを使いこなす力の発達は未熟であり、能力も様々である。そこを、親子でどのようにカバーしていくかがポイントと感じた。製作の基本である「折る」「切る」「貼る」のうち、子どもの年齢にあった作業を誘導し親子をサポートしている学生の姿があり、共に学びあう場であることを再確認した。

２）後期プログラム（10月～２月）

プログラム№⑥

活 動 名

ABCと「あ、い、う、え、お」

実 施 日・会　場

平成18年10月14日（土）　保育実習室

午前の部　10：00～12：00

午後の部　13：30～15：15

ね ら い

・日本語の五十音に対して英語はABC　の文字を使っていることを知り、国際語である英語に親しみを持つ

・遊び感覚で英語の歌を唄い英語を発音してみる

・絵本を英語と日本語の両方で読んでもらい、語学に慣れる

担 当 者　長谷部和子

参加人数　72名（父親　7名）

参加家族41組

手伝った人数及び学生

教員5名　学生：35名

内　容

スケジュール

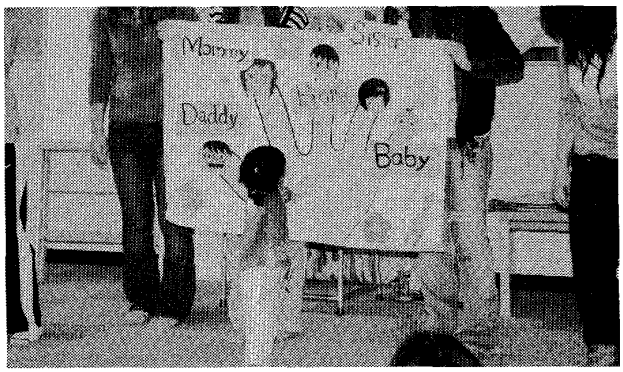
① Seven Steps
② Head,Shoulders,Knees and Toes
③ Five Little Ducks
④ 手作り絵本読み（Little Quack's Bedtime）
⑤ Daddy Finger
⑥ 大きな栗の木の下で
⑦ パネルシアター　「猫のお医者さん」

反省および考察

いつものように、開始は挨拶終了後の「手遊び（わにさん）」からだったが、２年生は、10月ともなると、今まで学んできた学習成果が、親や子どもたちの前で自信を持って表現できるようになり、オープニングから親子と学生の一体感が感じられた。

④の手作り絵本は、の大型絵本で全員での分担作業であったが、長い時間をかけて、バイリンガルに仕上げた。他の部分はグループごとに別れ、子どもたちに体を使って唄いながら、接した。

学生は張り切って、子どもたちと英語の歌を、絵本をと取り組んだが、子どもたちの年齢が低いせいもあり、考えたほど効果が期待できなかったようだ。しかし、親が喜んで取り組んでいるために子どもも一緒にと言う場面が多く見られ、親側のモーティベイションも需要であることが発見であった。



プログラム№⑦

活 動 名　「歌いましょう・踊りましょう」

実 施 日・会　場

平成18年12月2日（土）
午前の部　10：00～12：00
午後の部　13：30～15：15
保育実習室

ね ら い

・童謡を歌い、遊ぶことで歌詞を通したイメージを広げ、想像力を培う
・歌にあわせて踊る表現を通して親子がスキンシップを楽しみ、気持ちを開放する
・初めての体験（腹話術でのお話とマリンバの演奏）を楽しむ

参加人数

午前、午後あわせて　参加家族40組
保護者46名子ども59名　計105名

担 当 者　篠田美里

参加スタッフ

教員４名　　学生31名

内　容

参加希望幼児の年齢は２～３歳児が多い事を考慮し、親子でスキンシップをとれる活動を中心とする。また、歌う部分は歌詞をなぞって歌うのではなく、幼児が歌いやすい「ちゃちゃちゃ」などの部分唱とする。動いて気持ちを開放した後は大きなマリンバの演奏を聞く。トレモロ等の手の動きと普段からよく聞いているメロディがとても興味を誘う。最後は腹話術のミーちゃんが今日の体験を共有する。当日のプログラムは以下の様である。

１手遊び　・頭・肩・膝
　　・たーまご、たまご
２踊りましょう・ぐるぐるどかん
　　・アブラハム
３パネルシアター
　　・どうぶつむらのクリスマス
４歌いましょう・踊りましょう
　　・ジングルベル
　　・おもちゃのチャチャチャ

5聞きましょう（マリンバ）
・ミッキーマウス
・はたけのポルカ
・プーさん
6みーちゃんのおはなし
・たのしかつたね

反省および考察

この活動は、「子どもと音楽」について学んだ2年生が中心となってプログラムを企画構成し、当日の進行を担当した。「踊りましょう」では、子どもの身体表現を中心に考えた。特に、幼児と保護者とのスキンシップを図るねらいを達成できるよう、歌の振り付けを考えた。抱っこされたり、抱きついたりは日頃の生活の中でもよく見られる動作だが、歌の中に取り入れられることによって家族のだれとでも照れなくスキンシップが図れる利点がある。また、「歌いましょう」での部分唱や替え歌が楽しめる歌は親子でいつでも使える材料である。自分の体を楽器にしたり、身近にある廃材が楽器になったり、これらの遊びの提供は帰宅後家庭の中でも大いに楽しみが継続できることとなる。この意図を考慮し、学生の発案でプログラム企画をし、当日も進行することはしっかりとした責任感と見通しを持った綿密な計画が必要となる。2年生は1年生とのコミュニケーションを図りつつ、自分達の役割を認識し、楽しみながら責任を持ってこなしていく。そんな先輩の姿を真近にした1年生は、今、自分が出来ることを能動的に関わっていく。この体験は、保育者に必要な責任感を育てる教材となる。また、活動の中でみられる様々な親子の関わりを体験するチャンスもあり、これからの保育者に求められる子育て支援について、課題を発見できるチャンスでもある。そして、なにより、1、2年生のコミュニケーションが拡がる場でもある。この意味でもこの学習は、学生の育ちに繋がる貴重な機会となっているといえよう。

プログラムNo.⑧

活動名　「クリスマス会」

実施日・会　場

平成18年12月16日（土）　保育実習室
午前の部　10：00～12：00
午後の部　13：30～15：15

ねらい

・音楽や絵本、制作をとおしてクリスマスの雰囲気や冬の季節感を体験することにより、想像力や感受性を高めること。
・季節の行事をたのしむ気持ちを親子で共有すること。

担当者

杉山喜美恵・生嶌亜樹子

参加人数

午前の部27組（保護者25名・子ども30名）
午後の部14組（保護者17名・子ども19名）

手伝った人数および担当者

教員5名　学生56名

内　容

1．ハンドベル演奏
（「ジングルベル」ほか2曲）
2．クリスマス絵本
（『まどからおくりもの』五味太郎作）
3．クリスマスオーナメントをつくろう
・マスコット人形
・スプーンのオーナメント
・風船のオーナメント
4．クリスマスの歌をうたおう
（「あわてんぼうのサンタクロース」）

活動の導入においては、学生からの提案で、挨拶に先立ってハンドベル演奏を行うことで、クリスマスの雰囲気を盛り上げ静寂な雰囲気をつくり出すことを試みた。活動前、会場内で子どもたちは活発に走ったりあそんだりしていたが、サンタクロースに扮した学生たちが入場しハンドベルの音がすると、子どもたちの注目は自然と学生たちの方に集まり、効果的な導入部分を演出することができた。

ハンドベル演奏に続いて、学生代表の挨拶、クリスマス絵本の読み聞かせを行った。

今回の中心的な活動であるクリスマスオーナメントづくりでは、午前の部・午後の部で大まかに年齢層を分け、発達段階に応じた制作を企画した。内容は、低年齢児・高年齢児ともに、オーナメントのベースのみを設定し、多くの色

や形の切り抜き(星形など)を準備することで、一人一人が主体的な選択にもとづいて制作に取り組めるように配慮した内容とした。このことにより、親子で相談し合いながらともに制作にとりくみ、自由な発想による斬新なオーナメントが多数つくられた。　また、会場の中央には学生たちが手作りで制作した高さ1メートルほどの段ボール製のクリスマスツリーを配し、できあがったオーナメントを実際に飾りつけることにした。子どもたちが、背の届かない高い位置に学生や保護者に抱きかかえられて飾りつけを行っている様子がみられた。

活動の最後には、「赤鼻のトナカイ」の歌にちなんだ学生による簡単な劇を楽しみ、全員で歌って締めくくりとした。

反省および考察

今回の活動では、親子1組を学生1名が担当し、制作の支援を行った。適切な支援を行うことができた学生もいたが、十分なかかわりをもつことのできなかった学生も見受けられた。親子が活動の中心であることを前提としたうえで、保育者が状況に応じた適切な支援を行うというテーマは、子育て支援事業の拡大に対応した保育者の新しい力量の育成に

オーナメントづくりの様子

おいて今後の中心的な課題となるといえよう。

プログラムNo.⑨

活 動 名

「クッキーの粘土あそび」

実 施 日

平成19年1月27日（土）　集団給食室

午前の部　10：00～12：00

午後の部　1：30～15：15

ね ら い

・親子で楽しい手作りおやつ作りを体験する。クッキーの生地を粘土に見立てて造形遊びをし、子どもや親の想像力を刺激する。

・食べ物を大切にする気持ちを養い、食に対する意識を高める。

参加人数　　総参加人数93名

午前　参加家族20組　保護者25名(母親20名・父親5名)子ども33名　計58名

午後　参加家族11組　保護者13名(母親10名・父親3名)子ども22名　計35名

担 当 者　　若杉雅夫

参加スタッフ

教員：7名(幼教4名・食栄3名)学生：66名(幼教64名・食栄2名)

担当内訳/案内・受付・託児・遊びの支援

内　　容

今回の「クッキーの粘土あそび」は、昨年度最終回のプログラムで実施して好評を得たもので、本年度の「あそびの森」でも前回同様、食物栄養学科の協力の下に、集団給食室を活動の場として実施した。

昨年同様、一つのテーブルに一～二組の家族がつき、クッキーの生地作り(白・茶・緑の三色)から始め、形作り、焼き上がり、試食までをフルコースで楽しんだ。形作りでは、生地を粘土に見立て、自分だけのオリジナルクッキーをたくさん作った。既製の抜き型を使わずに、握ったり潰したり、押したり摘んだり、そっと撫ぜたりし、生地の感触を楽しみながら、子どもも保護者も思い思いの形作りに挑戦した。

形が出来上がったクッキーの生地は、食物栄養学科の教員(3名)がフル回転で焼き上げを担当した。焼き上がるまでの待ち時間は、15分～20分ほどあったが、焼き上がりの期待感に胸を膨らませながら家族と話しをする子どもや、に元気に学生と遊ぶ子など頑張った後の楽しい休憩時間になったようである。そして、焼き上がったクッキーがテーブルの上に並ぶと、参加者全員の目がお皿に釘付け

になった。

作り上げた達成感を感じつつ、それぞれの作った形について話を弾ませながら、クッキーに舌鼓し、最後は大切に包まれたお土産を手に、皆さん笑顔で家路につかれた。

今回学生は、各テーブルに一人ないし二人つき、クッキー作りの援助を行った。

反省および考察

二回目の活動になるが、内容が食品を扱うため、材料用具の準備、学生の支援のあり方、クッキー作りの方法など、前回同様かなり綿密に計画し実行した。しかし、前回の反省を踏まえて今回は、参加した親と子が、活動の過程で失敗も含め、自ら考え工夫する余地を残した。実際、参加した家族は、浮かび上がった問題点に臨機応変に対応し、力を合わせて解決策を編み出していた。また、問題を親子で協力して取り組んだ体験や、解決したときの喜びと達成感の共有が、親と子の信頼関係を深めていったと考える。さらに、自ら考えて解決を導いた経験は、喜びも深く、本当の意味で人としての成長を促すと考える。

活動の支援に関しては、ゼミの１．２年生が力を合わせて取り組んだ。２年生に関しては、参加者とのコミュニケーションを円滑に行い、一定の関わりを深めることができたと考える。しかし、１年生については、その点で経験不足の観は否めなかった。この状況は、「あそびの森」の学びの成果が、着実に２年生の成長を促していることを証明している。

図−１生地作り全景

図−２おとうさんも一生懸命

また、１年生に関しては、今後の指導の課題が具体的に浮かび上がったと捉えている。

プログラムNo.⑩

活 動 名　「つくって遊ぼう・子育て懇話会」

実 施 日　H19年２月17日（保育実習室）
10：00〜11：45，13：30〜15：00

ね ら い

・新聞紙やペットボトル，紙コップなどを使って，遊ぶ物を作ったり，作った物で遊んだりして楽しむ

・子育てについて，日頃思っていること，困っていることなどを話したり，他の人の意見を聞いたりして子育て談義を楽しむ

担 当 者　三羽佐和子

参加人数 57名　参加家族22組
（保護者25名／子ども32名）

手伝った人数および担当者
教員：５名　学生22名（三羽ゼミ）
担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

内　容

＜つくって遊ぼう＞

・新聞紙遊び・・破ってある沢山の新聞紙を投げたり，その中に埋まったり，友だちを埋めたりして遊ぶ。とても盛り上がった。投げたり，埋まったり，新聞紙の山へ飛び込んだりとどの子も夢中になって遊んでいた。大きな新聞紙破りをする姿も見られた。それをビニール袋の中に入れてボールを作り，投げたり，かごの中へ放り入れたりして遊ぶ。

学生の意図では，豆まきをするつもりで，お面も用意したが，それより上記の遊びで思いっきり楽しんでいた。

・　マラカス作り・・２個の紙コップに好きな絵を描き，合わせてその中にビーズを入れ，マラカスを作る。それをを鳴らして遊ぶ。セロテープで留めるところは，学生が手伝っていた。

マラカスを振って楽しむより，作って楽しむ姿のほうが多かった。女児の中にはビーズを長くつないで喜んだり，ブレスレットを作ったりする姿も見られた。

・　ボーリング遊び・・ペットボトルに絵を描いて，新聞紙で作ったボールを転がして当てて遊ぶ。

転がす距離を年齢で考えたり，新聞紙の中心に石を入れ，重さを調節したりするなど考えて用意をしていた。子どもは学生にほめられ，結構楽しんでいた。

＜子育て懇話会＞

・　子育て懇談会は，人数がちょうど良かった。また，コーディネーター役を元幼稚園長などベテランの保育者が務めたので，話がとても盛り上がった。１時間弱の時間を予定していたが足りなかった。なかなか終われず，子どもを待たせることになった。

・　話題は子育て全般と，保育所，幼稚園選びやお稽古ごと，姑との付き合い等，様々な話題が出た。

・　赤ちゃん返りをしたときの対処の仕方はどうするか。かみつく癖があるがどう叱ったらよいか。下の子どもに焼きもちを焼くがどうしたらよいか等，日常的な事柄一つ一つが親としては気になるようで，そんなことも話題になった。

反省および考察

・遊びは学生に任せたが，実習で実際に行っていたことをしたりしたので，落ち着いて行っていたように思えた。経験がものを言うと感じた。

・試験休みのためリハーサルから日が経っていたり，１年生は実習の間で欠席者が多かったりして，予定と異なり大変だった。日の取り方を考えたい

・遊びによって，参加者の偏りが見られた。分けてすることも考えたが，子どもの自主性を大切にしたいので，あえて人数を振り分けることをしなかった。

・遊びは新聞遊びがすごく盛り上がった。やはり，自宅では出来ないダイナミックな遊びを子どもたちが求めていると感じた。

３）その他のプログラム

その他のプログラム①

活 動 名

「あそびの森で遊びましょう」

実 施 日・会　　場

平成18年９月17日（土）10：00～12：00

・JR岐阜駅ハートフルスクエアーG

ね ら い

・ペープサート劇や演奏を親子で観賞し楽しむ

・子どもの活気ある活動・交流を促す。

・人間関係の広がりを培う。

担 当 者　　若杉・篠田・三羽

参加人数　　66名（子ども34名　大人32名）

参加スタッフ

教員：３名　学生14名

内　　容

・ペープサート劇を観ましょう

「キラリのまほうのかがみ」

・歌ったり、踊ったり、聴いたりしましょう

「アブラハム・ポキポキダンス・さんぽ」

「プーさん・ドラえもん・畑のポルカ」

・さわってみましょう（感触あそび）

「小麦粉粘土・スライムであそぼ」

反省および考察

出張開催は初めての試みであった。主催は、岐阜市女性センターであり、「次世代育成支援事業」「HAPPYDAY」として2日間開催される中の半日を依頼された。開催までには何度も主催側の担当者と、綿密な計画で進めたが、心配は参加にたいして申し込みをするわけではないので、どれくらいの参加者があるのかということであった。沢山の荷物と学生の移動は休日であったが、スクールバスを依頼した。

当日の様子としては、マリンバ演奏や、ペープサート劇、絵本あそびは親子ともくいいるように喜んで見てくれた。小麦粉粘土などの感触あそびは子どもだけでなく、大人のこころもとらえたようだつた。この様な遊びは、こころを開放する効果があり、子どもにとって大切なあそびである。また、テレビづけのこどもたちの生活を考えると生の演奏や生の声でのペープサート劇や絵本に触れる機会は大切なことと考える。どの子も心豊かに育つ願いから、こうした機会に多くの親子と関われ多くを提供できたと感じた。短い時間であったが、子どもと（大人にとっても）心温まる時間を共有できたことは、学生にも貴重な体験の場となった。さらに、保育者実習とはちがって、様々な、子どもと親の関わりが体験できたことも今後の保育者の資質向上に繋がるといえよう。

その他のプログラム②

活 動 名

「あそびのもりたんけんかい」

実 施 日・会　　場

平成18年12月15日（水）・保育実習室
10：00～12：00

ね ら い

・大学にある「あそびの森」を体験する
・ペープサート劇を観賞する

担 当 者　若杉・篠田・三羽

参加人数　35名　（保育者5名/園児30）

参加スタッフ

教員：3名　学生：14名

概　要・内　容

ペープサート劇「だれのじてんしゃ」
みんなで踊ろう「ぽきぽきだんす」
マリンバを聴こう「ぷーさん・ミッキーマウス・ちいさなせかい」

反省および考察

本学卒業生が担任している5歳児、30人が園バスで、社会見学の一環としてやってきた。大学ってどんなところ？ということ。そして、そこに、「あそびのもり」がある。とはきっと驚いたであろう。

初めて聞く、2台のマリンバ演奏や、生の声で演じられるペープサート劇にどの子も夢中で食い入るように見てくれた。演奏後、おおきなマリンバを弾いてみる体験タイムも設けた。子どもたちにとって大きな感動を味わった半日であったようだ。学生たちも、企画、進行を自分たちで責任を持って行った。見通しを持って、一つの会を運営できた体験を通おし、主体的に責任をもって会を進めることを学ぶ貴重な場となった。保育者に必要な資質（責任感）の成長が見られることは学生にとってよい体験の場であったと感じる。

その他のプログラム③

活 動 名

「幼稚園交流会」

実 施 日・会　　場

平成19年2月6日（水）10：00～14：00
保育実習室

ね ら い

同年齢の子どもの活気ある活動・交流を促す。
小学校入学に向けて人間関係の広がりを培う。

担 当 者　若杉・篠田・三羽

参加人数　45名　（保育者5名/園児40）

参加スタッフ

教員：3名学生：4名

概　要・内　容

「幼稚園交流会」は、岐阜市立東幼稚園と大洞幼稚園がともに単一学級のため、同年齢の子どもの活気ある活動・交流を促すため年五回、お互いが持つ施設の有効利用も兼ねて両

園で交互に実施されている。両園児交流の最後の場として「あそびの森」が活用されるのは、今年で三度目となる。交流の締めくくりとして利用される理由は、本学が両園の中間地点に位置し、交通の便が良く、遊びの空間として施設が充実し、さらに大学側からも遊びのプログラムを提供できることにある。

交流会の内容は、幼稚園が企画したリズム遊びと歌の交流を主とし、その合間に自由参加で、大学側が交流会の記念に残る活動として設けた製作コーナーで、ナスやキュウリなどの野菜を墨絵で描く活動が加わる。最後は、みんなでお弁当を食べ、友達の輪を広げ交流会を終える。交流会のプログラムは、この三年間、おおよそ以上の内容で実施している。大学が提供する墨絵コーナーは、参加を義務付けないにもかかわらず、全園児が自主的に墨絵を描いていく。

※子どもの墨絵は、額の代わりに色画用紙の台紙に貼って、持ち帰るようにしている。

反省および考察

今年で三年目となる「幼稚園交流会」は、ここ数年同じ内容で実施している。幼稚園サイドのプログラムについては、大学側として意見を述べる立場にないが、大学が提供する内容については、そろそろ検討を要する時期ではないかと考えている。しかし、墨絵に関しては両幼稚園とも大変評判がよい。プログラムを改めるとしても、この活動に匹敵するような、効果的な内容を考案する必要がある

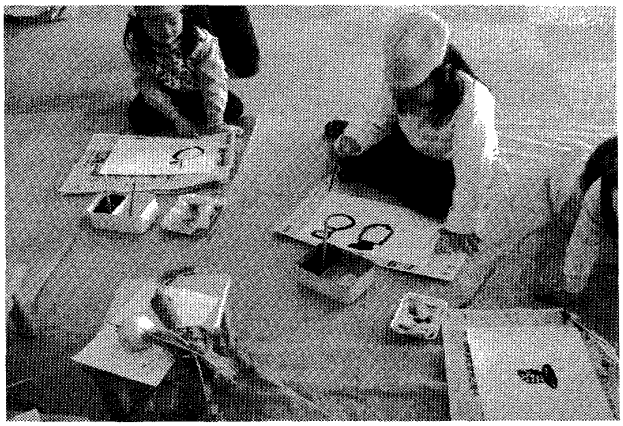


図-1 墨絵の制作活動

図-2　遊んだ後の集合写真

と考えている。

総　括

本学、児童学科幼児教育専攻が「地域との共生」をテーマに、「子育ち・親育ち・学生の心の育成」を理念にはじめた「あそびの森」も、3年(5ターム)を経ることができた。参加人数も、初年度は約500人、次年度は約900人、今年度は約1100人と増加してきた。近隣の幼稚園・保育所にチラシを配布し、参加者を募った初年度を思い起こすと、現在は少しずつ地域に根付いてきたと感じられる。常に、この「子育て支援プログラム」としての、「あそびの森」のコンセプトを揺らすことなく、今後も継続していきたいと願う。今年度の特色としては、新しい試みを含め、以下の3点が挙げられる。

まず、新しい試みとなった「出張開催」である。「あそびの森」の活動が、昨年度、岐阜県地域文化研究所の「子どもの遊びのイベント化の可能性」の調査対象となり、報告書を提出した。この契機により、岐阜市女性センターから、次世代育成支援事業「HAPPY DAY」の出張開催依頼があった。JR岐阜駅のハートフルスクエアーGという不特定多数の方が行き交う場所での開催は、新たな参加者に遊びが提供できる場となり、「あそびの森」の輪が拡がる機会となった。出張開催を実施するには、多くの荷物の移動と学生の移動が伴う。今年度は荷物の移動を教員の車3台で行い、学生は要望により現地集合とした。「HAPPY DAY」に参加された親子の様々な関わり方を

体験し、新たな視点から子育て支援を考える契機となった。

２つ目は、懇話会の継続と発展である。懇話会は、昨年度より始めた企画であるが、参加者は一様に「話すことで楽になった」「他の人も同じ悩みを持っていることがわかった」などと、自身の体験を相対化・客観化する機会に繋げ、自分への気づきに結びつけている。今年度は、さらに「わいわい育児を語る会」を企画し、試みた。懇話会ほど構えずに、２～３人から３～４人のグループでわいわいとお互いに話す中から自身が気づいていくことがねらいである。この機会が自身の育児の自信に繋がり、育児の力となっていくことを願う。

３つ目は、学生の成長と、教員の意識改革である。様々な遊びを子どもに提供するためには、学生も教員も柔軟な思考と、想像的かつ創造的な思考が求められる。次世代育成支援の中核である「子育て支援」を、保育者が担っていかなければならない現状を鑑みると、学生の「あそびの森」での取り組みが、保育者に必要な資質である、「主体性」と「責任感」を培い、子育て支援の必要性を学ぶ貴重な場になっている。また、「あそびの森」各プログラムの考察・記録からは、学生の主体的な関りや活動に対する真摯な取り組みが読み取れる。この活動を通した学生の育ちの証といえよう。

さらに、ゼミ単位で取り組む「あそびの森」活動は、企画から実施にいたるまで、常に、学生と教員が、共に、提供する遊びの「ねらい」「内容」「進行方法」等についてアイデアを出し、ディスカッションを繰り返していく。その中から幼児理解と、子育て支援に関する、学生と教員及び他のゼミ教員との情報交流が生まれ、それと共に、保育の現状についての共通理解が深まった。さらに、この取り組みが、各教員の保育者養成に対する意識改革をも促し、幼児教育専攻の活力を高める結果となった。

おわりに

「あそびの森」も平成18年度より本学の「子育て支援センター」の役割も担うこととなった。また、保育者を対象とした「保育を語る会」も発足した。それに伴い、教員の意識も高まり、幼児教育スタッフとしての共通理解が益々高まってきた。

また、「あそびの森」の活動を通して大学が地域への貢献の責務を担っていることの理解や、どのような内容を提供しているのかの具体的な広報となり、地域の方々に、より、大学が身近なものとして捉えていただける「材料」となってきた。最後に、この「あそびの森」の運営に関わっていただけた多くの協力に感謝いたします。

― 児童教育学科　幼児教育専攻 ―

《記　録》

2006年度「あそびの森」運営担当者

運　　営

若杉　雅夫　三羽佐和子　松尾良克
伊藤　功子　長谷部和子　篠田　美里
杉山喜美恵　瀬地山葉矢　生嶌亜樹子

事務担当

三羽佐和子　瀬地山葉矢　生嶌亜樹子

全プログラム　親子名札製作　松尾良克
出席カード製作及び室内装飾　　若杉ゼミ生

2006年度　「あそびの森」プログラム

場所：東海女子短期大学７号館５階　　保育実習室あそびの森

＜前期プログラム＞　時間 AM10時～12時

No	開催日	あそび	どんなあそび
1	5月27日	小麦粉粘土で遊ぼう	丸めたり，のばしたり，ちぎったりなどしながら，小麦粉粘土のさらさら，べとべと，すべすべ感を身体で感じて楽しみます。手ふきタオルを持ってきてね。
2	6月24日	㊔親子育て懇話会 ㊑子お話の世界で遊ぼう	少人数のグループになって，お父さんお母さんたちで子育てについて話しましょう。ファシリテーターとして各グループに臨床心理士が入ります。 お子さんは，学生と一緒に絵本や紙芝居を楽しみます。
3	7月8日	段ボールのパズル絵遊び	段ボールの切れ端をいろいろな形に貼り合わせて，絵描き遊びをしよう。 必要なもの・・・クレヨン，手ふきタオル
4	8月26日	跳んだり，跳ねたり，転がったりして遊ぼう	発達が著しい２歳から６歳の時期に身につけたい，神経系の発達が促進できるような遊びを親子で楽しみましょう。親子とも動きやすい服装で来てください。
5	9月9日	親子で作るペーパークラフト	インターネットから取り出した紙のおもちゃを，親子で一緒に作って遊びます。 はさみとのりを持ってきてね。

＜後期プログラム＞　時間　AM10時～12時　団体鑑賞については相談に応じます。

6	10月14日	‘ABC’と‘あいうえお’	日本語と英語の大型絵本をお姉さんが読みます。手遊びをいっぱいしながら，みんなで登場人物になりましょう。
7	12月2日	歌いましょう踊りましょう	変身ごっこで歌いましょう。踊りましょう。あなたは何に変身しますか？終わった後は，人形のみーちゃんのお話を聞きましょう。
8	12月16日	クリスマス会	歌，ゲーム，お話など，お姉さんと一緒に一足早いクリスマスを楽しんでみませんか。
9	1月27日	粘土遊びのクッキー作り	クッキーの生地を粘土に見たてて，色々な形を作って，お菓子作りを楽しみます。どこにも売っていない自分だけのオリジナルクッキーが出来るよ。 必要なものは材料費として１家族100円，エプロン，バンダナ
10	2月17日	㊔親子育て懇話会 ㊑子つくって遊ぼう	小グループに分かれて，子育てについて話しましょう。悩みも辛い思いもみんなとワイワイ話をすれば楽になります。 お子さんはお姉さんたちとリズム遊びを楽しんだり，楽しく体操をしたりします。

平成18年度「あそびの森」参加者数

回		組	子ども	大人計	母　親	父　親	その他	
1	5月27日	44	65	47	43	4		112
2	6月24日	17	29	22	17	3	2	51
3	7月8日	48	80	60	46	10	4	140
4	8月26日	56	85	63	18			148
5	9月9日	18	32	18	18			50
	前期合計	183	291	210		17		501
6	10月14日	41	72	48				120
7	12月2日	40	59	46				105
8	12月16日	37	49	42	37	3	2	91
9	1月27日	31	55	38	30	8		93
10	2月18日	22	32	25	22	3		57
	後期合計	171	267	199		6		466
	小合計	354	558	409				967
	出張あそびの森							
	9月17日	28組	34	32	ハートフルスクエアーG			66
	まどか幼稚園12/15		30	5				35
	幼稚園遊びの交流							
	2月10日		40	5				45
	小合計		104	42				146
	総合計		662	451				1113
	参加人数総合計		1113					